

2 0 1 7 年度

学生による授業評価
よりよい授業を目指して

報 告 書

2018年10月

和洋女子大学

目次

1. はじめに	2
2. 授業評価実施概要	3
3. 総括	4
(1) 全学授業評価結果の概要	4
(2) 共通総合科目の課題	11
(3) 専門科目の課題	14

巻末付録:2017 年度授業評価アンケート調査用紙

1. はじめに

和洋女子大学では、教育の質を点検する方法の一つとして、学生を対象とした授業評価アンケートを実施している。少人数科目などは回答にバイアスが生じやすいため対象としていないが、開講科目の約6割に当たる927科目を対象として実施している。調査結果は本学の教育を学生の視点で検証する指標として活用している。

今年度は、常勤教員が担当する授業に加え非常勤教員が担当する授業についても調査を実施した。学生の回答は担当教員を経ずに学事課で集約し、集計分析を行った後、科目ごとの評価結果と学生の授業に対する自由記述をそれぞれの教員にフィードバックしている。

本報告書は学生の評価結果を各教員が分析し、今後の授業についての授業に対する展望をまとめている。さらに今年度は学生からの評価結果が高かった上位10名の教員の所属と氏名を公表することとし、広く周知することで教員の教育実績になることを目指した。なお、上位10名に続く専任教員との得点差はわずかであり、総じて本学教員は学生から高い満足度を得る教育を行っていることを付け加えておく。

また、授業は周知のとおり学生との双方向の交流で作られる。そのため学生の教員との相性なども評価結果を左右することもある。したがって単純に授業満足度の数値変動だけを見るのではなく、専任教員は、自由記述欄に残された学生の声を拾い、数値の経年変化などを総合的に判断して、点検報告書を記述している。

授業は生産と消費が同時に行われ、再現が困難なサービスである。学生が授業を振り返って評価したことを我々教員は真摯に受け取り、形を留めない授業の評価と点検に今後も活用することとしたい。

最後に、多数の授業評価にまじめに取り組んでくれた本学の学生に対して、心よりお礼を申し上げる。また、多忙な中、授業評価結果をもとに自身の授業を振り返り、点検を行ってくださった本学の諸先生方にも心より感謝したい。

和洋女子大学 学長
岸田宏司

2. 授業評価実施概要

授業評価は、前期開設科目については2017年7月10日（月）～8月1日（火）、後期開設科目及び通年開設科目については2018年1月10日（水）～2月3日（土）の期間中に実施した。

2017年度の開設授業科目は、前期670科目、後期606科目、通年110科目、前期集中46科目、後期集中11科目、通年集中63科目で、合計科目1,506である。このうち授業評価対象科目は、オムニバス科目、佐倉セミナー科目、学外実習科目、集中科目、大学院科目、同時開講科目、読替科目、また受講者数10人以下の科目を除いた927科目で、全開講科目の61.5%に相当する。ただしこの対象科目のうち前期8科目、後期14科目が未実施となったため、全開講科目のうち授業評価を実施した割合は60.0%である。

評価は、マークシート方式のアンケートによる評価と自由記述による評価を併用し、各授業科目について両者を学生に記入させ、回収した。

アンケートの設問は付録「授業アンケート」のとおりである。主に教授方法・スキルに関する評価、授業準則・秩序に関する評価、知的刺激や理解度関連達成度に関する評価、主体的学修に関する評価、教員の熱意に関する評価、総合的満足度、学生自身の授業への参加度に関する自己評価などの項目から構成されている。なお、アンケートは5段階評価として設計されている。5は「強くそう思う」（Q15は「3h以上」、Q19は「大変満足」）、4は「そう思う」（Q15は「2～3h未満」、Q19は「やや満足」）、3は「どちらでもない」（Q15は「1～2h未満」）、2は「そう思わない」（Q15は「1h未満」、Q19は「やや不満」）、1は「全くそう思わない」（Q15は「特にしていない」、Q19は「不満」）、0は「該当しない・答えたくない」を意味している。

調査は、実施期間中の各授業の終了時のほぼ15分程度を利用し、原則として授業科目担当教員が用紙を配布し教員が教室を退室した後、記入と回収を学生自身が行なった。

アンケート用紙は、業者に委託して集計し、授業科目ごとの結果は科目担当教員に通知される。各教員は、授業評価の結果を各自で検討し、その感想・今後の授業改善への抱負などについて、全担当科目を総括して A4 版 1 枚に所感を作成した。この文書はネットワークにて教職員が閲覧することができ、学内、相互の授業改善の工夫等を共有している。

3. 総括

(1) 全学授業評価結果の概要

以下に評価結果の全体概要を示すこととする。個々の授業についての評価結果を全体としてまとめたものが[表 1]である。

1) 前回調査結果との比較

2017 年度（平成 29 年度）の授業評価アンケートでは実施にあたって、2016 年度（平成 28 年度）の調査実施要領を引き続き実施した。

ただし調査対象科目は前回の受講者数 20 人以上から受講者数 11 人以上の科目として設定した。

調査結果では対象科目の履修者数が 40,541 名、回収数も 34,801 名、回収率 86%を示し、前回調査の回収率 87%とほぼ同じであった。質問項目 Q1～Q19 全項目について、2016 年度比で上昇している。「Q19. 授業の総合的満足度」が前回の平均評価 4.08 から 4.10 へと 0.02 ポイント上昇したのに加えて、前回、評価値が下がった質問項目「Q13. 積極的に意見や質問をした」は、2016 年度の 3.19 から 3.32 へとわずかながら上昇した。「Q14. よく出席した」が 2015 年度の 4.42 から 2016 年度 4.41 へと減少したが、2017 年度は 4.43 と上昇した。他の項目はいずれも平均評価が上昇した。

2) 教員の授業運営

①授業の方法・スキル

学生が教員の授業運営と学習指導、とりわけ授業の方法やスキルについてどのように評価しているかに関わる質問項目は、Q4 から Q8 であり、それぞれの評価平均値を見ると、「Q4. 教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」（評価平均値 4.04）、「Q5. 教材が理解に役立った」（4.18）、「Q6. 教員の板書や図の見やすさ」（4.02）、「Q7. 教員の声が聞き取りやすかった」（4.20）、「Q8. 説明がわかりやすかった」（4.07）であり、全体的には評価されているように考えられる。いずれも前回に比べて評価がやや高まっているが、「Q4. 理解度に合わせて授業を進めた」および「Q6. 教員の板書や図の見やすさ」の評価値が相対的に低かったが、2017 年度ではそれぞれ Q4（4.04）、Q6（4.02）と上昇した。教員が授業スキルの向上に努めていることが伺える。

[表1]授業アンケート結果集計表(全学)

キャンパス		曜日	履修者数	40541名
学部		時限	回収数	34801名
教員		教室	回収率	86%
科目	全体			

項目別回答分布(人数と平均値)

	5	4	3	2	1	無回答	全体平均
Q1.シラバスに沿っていた	12507	18013	3417	500	179	185	4.22
Q2.内容は知的刺激に富んでいた	13136	16612	3877	745	320	111	4.20
Q3.新しい知識・技術を学べた	14029	16179	3608	620	253	112	4.24
Q4.理解度に合わせで授業を進めた	11839	15122	5681	1399	607	153	4.04
Q5.教材が理解に役立った	13476	15373	4475	901	363	213	4.18
Q6.教員の板書や図の見やすさ	11636	14321	5734	1643	635	832	4.02
Q7.教員の声が聞き取りやすかった	14321	14873	3917	1106	466	118	4.20
Q8.説明がわかりやすかった	12671	14624	5128	1614	635	129	4.07
Q9.質問への対応が適切だった	12387	14809	5841	849	404	511	4.11
Q10.開始・終了時間が適切だった	14740	15111	3602	861	340	147	4.24
Q11.私語に対し適切な対応だった	12570	15209	5572	715	298	437	4.14
Q12.教員の熱意を感じた	14465	14972	4375	546	287	156	4.23
Q13.積極的に意見や質問をした	5449	8848	11984	4326	2421	1773	3.32
Q14.よく出席した	19621	10853	3356	490	149	332	4.43
Q15.予習・復習の時間	3024	4282	6346	5942	11575	3632	2.40
Q16.試験に積極的に取り組んだ	11593	13597	6932	868	461	1350	4.05
Q17.さらに勉強したくなった	9628	14590	8035	1389	737	422	3.90
Q18.受講を後輩に勧めたい	11594	13842	6978	1080	783	524	4.00
Q19.授業の総合的満足度	12457	14997	5541	835	583	388	4.10

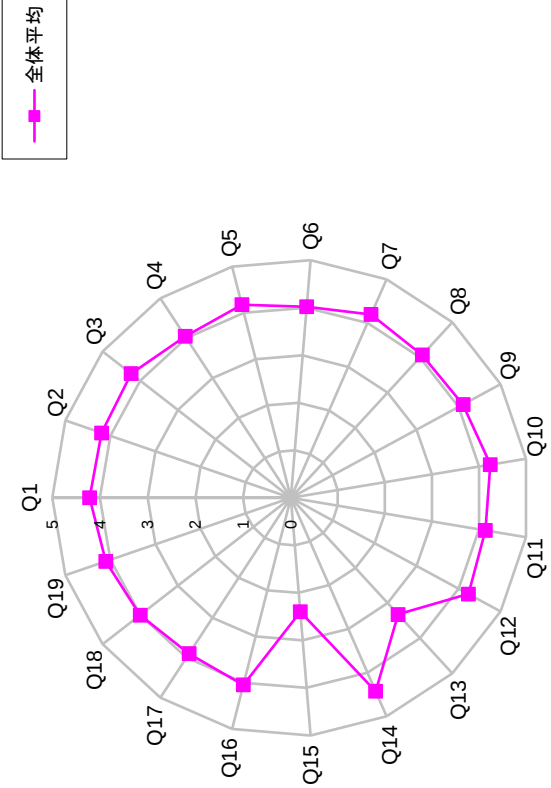
【Q14】で授業への出席率の高い群(5・4)の回答分布

	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q2.内容は知的刺激に富んでいた	12346	14821	2471	570	217	49	4.27
Q4.理解度に合わせで授業を進めた	11099	13638	4040	1148	468	81	4.11
Q5.教材が理解に役立った	12573	13776	3010	695	271	149	4.24
Q6.教員の板書や図の見やすさ	10876	12928	4151	1345	484	690	4.09
Q7.教員の声が聞き取りやすかった	13352	13310	2523	890	346	53	4.26
Q8.説明がわかりやすかった	11835	13227	3550	1316	482	64	4.14
Q11.私語に対し適切な対応だった	11777	13705	3908	560	214	310	4.20

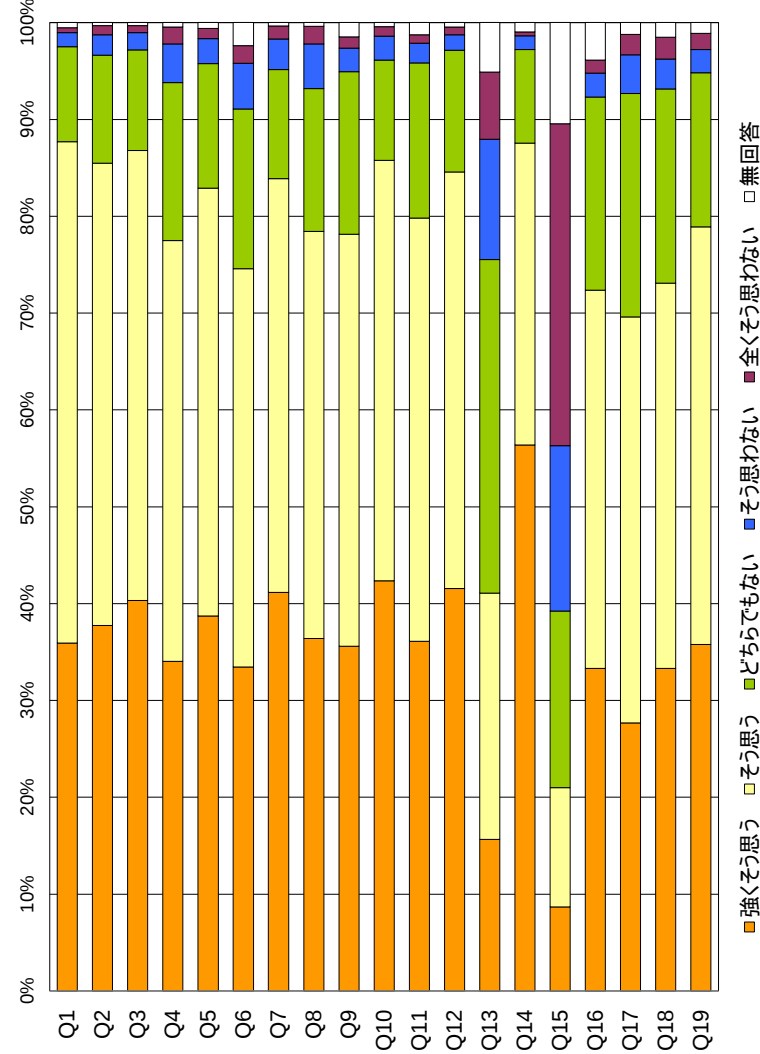
【Q14】で授業への出席率の低い群(3・2・1)の回答分布

	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q2.内容は知的刺激に富んでいた	693	1677	1356	170	89	10	3.68
Q4.理解度に合わせで授業を進めた	655	1382	1570	245	122	21	3.55
Q5.教材が理解に役立った	808	1485	1412	199	80	11	3.69
Q6.教員の板書や図の見やすさ	680	1292	1526	285	135	77	3.54
Q7.教員の声が聞き取りやすかった	874	1455	1350	204	103	9	3.70
Q8.説明がわかりやすかった	749	1302	1515	285	135	9	3.56
Q11.私語に対し適切な対応だった	711	1400	1605	149	71	59	3.64

<評価レーダーチャート>



<評価帯グラフ>



②授業の進め方

教員の授業の進め方や授業中の教室の秩序維持について学生がどのように評価しているかは、3つの質問項目の評価平均値、すなわち「Q1. シラバスに沿っていた」(4.22)、「Q10. 開始と終了時間が適切だった」(4.24)、「Q11. 私語に対し適切な対応だった」(4.14)からすると、おおむね評価されていると推測できる。なかでも、前回の調査結果についても指摘された、私語に対する適切な対応に関しては、3.96から4.06、2017年度は4.14へと評価値が年々上昇しており、教員の側における対応の変化が窺える。

③知的刺激

前々回の授業評価アンケート結果についての総括においては、「Q4. 新しい知識・技術等を学ぶことができた」の評価値(4.11)に対して、「Q2. 授業の内容は興味・関心を引くものだった」の評価値(4.01)や「Q18. この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」の評価値(3.80)が低かったことから、受講者への知的な刺激が不足している傾向にあるのではないかと指摘した。

それを踏まえて、前回の調査からは既述したように、「Q2. 内容は知的刺激に富んでいた」と直接的な表現を用いた質問項目を設定した。その結果、知的刺激を受けたことを評価する回答が多かった(4.20)半面で、「Q17. この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」の評価値は前回よりやや高くはなったものの、ほぼ同水準(3.90)にとどまった。そのことから、授業中に受けた知的刺激が学習意欲を十分に引き出すまでには至っていないように思われる。

④主体的な学びの促進

大学での学びにおいては学生が自ら学び、考える姿勢を修得することが求められる。しかし、大学のユニバーサル化が進むにつれて、目的意識が希薄で主体的に学ぼうとする学生が少なくなったと指摘されることが多くなった。今回のアンケート調査では受講者の主体的な学びに関連する質問項目と考えられるのは上述した「Q2. 知的刺激に富んでいた」(4.20)、「Q9. 教員は学生の質問、相談に適切に対応した」(4.11)、「Q13. 積極的に意見や質問をした」(3.32)および「Q15. 予習・復習の時間(の長さ)」(2.40)であり、これらの評価値から推測すると、予習・復習の学習時間が前回よりも多くなり、全体として学生の主体的な学びを促したように思われる。とりわけ、授業への出席率の高い学生の間で「Q2. 知的刺激に富んでいた」評価値(4.27)が高く、それが主体的な学びへと結びつきやすいと考えられるのに対して、出席率の低い学生の間ではその評価値(3.68)が低く、主体的な学びにつながっていないように思われる。本学では「きめ細かな指導」を教育の柱のひとつとして掲げ、出欠調査等を通じて欠席がちな学生への指導を継続して行ってきたが、それに加えて、出席率の低い学生への授業内での指導をどのように行うかを検討する必要があるように思われる。

主体的な学びを導く学習環境のひとつの要素として、授業において教員の熱意が受講者に感じられるかどうかがある。担当する教員の熱の入った授業は、受講者にとって強い刺激を与えるものであり、教員にとっても自分の授業を受講する学生の間で「Q12. 教員の熱意が感じられた」かどうかは、最も関心を払わなければならない質問項目であろう。この点で、「Q12. 教員の熱意を感じた」の評価値は2015年度(4.11)、2016年(4.21)、2017年度(4.23)と上昇しており、総じて肯定的な評価が下されていると見なすことができる。

3) 学生の自己評価

前回の総括において、学生自身の自己評価から推測した修学像として、「出席はするが、積極的に質問したりすることはせず、また予習復習をあまりしない」学生像を確認したが、今回の調査結果もほぼ同様の学生の姿を描くことができる。「Q14. よく出席した」(4.43)は、質問項目の中で最も評価値が高いが、一方で「Q15. 予習・復習の時間」(2.40)は少なく、「Q13. 積極的に意見や質問をした」(3.32)り、「Q16. レポートや試験に積極的に取り組んだ」(4.05)の評価値からはあまり積極的に勉学に取り組んだとは言い難い。教員にとっては学生が自ら学ぶための授業の工夫とそれに基づく授業運営の在り方について共同して検討を進める必要があろう。

4) 受講者の状況別授業満足度

①受講者数との関係

受講者数と総合的満足度の関係を明らかにするため、895 科目について人数区分毎に満足度の平均点を[表 2]に示した。この満足度評価については、教員評価の一項目として使われていることや、学習効果を学生自身の「満足度」で測定することの意味について議論が必要なことに加え、今回の解析に関しても探索的なものであり、最終的な評価をするためには別途詳細な解析が必要ではあることを最初に述べておく。

[表 2] 受講者数と満足度

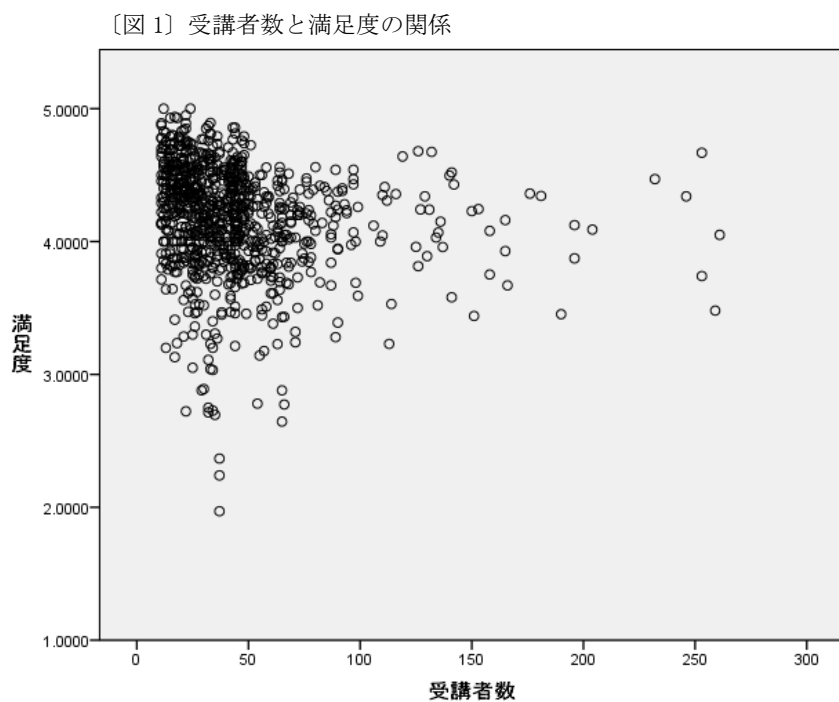
受 講 者 数	11 人～	20 人～	30 人～	50 人～	100 人～	150 人～	合計 平均
科 目 数	153	184	312	200	26	20	895※1
満 足 度	4.34	4.22	4.15	4.02	4.16	4.02	4.15※2

※1 外れ値と考えられる 2 名の科目は除いた。

※2 満足度は小数点第 3 位以下を四捨五入しているため、それぞれの合計が必ずしも※2 とは一致しない。

今年度の結果では、実際には 30 人未満のクラスにおいて、満足度が平均値を上回り、30～50 人のクラスでは、全体の平均値に収束している傾向が見られ、10 人以下のクラスにおける満足度が高い傾向があると判断することが出来る。100 人以上のクラスにおける満足度は対象クラスが合計でも 46 クラスで他の区分に比べて少ないため、[表 2]の数字だけで人数が多いクラスでも満足度が高いと判断することは難しいと考える。特に、受講生が 100 人以上の科目はそれ以下の科目よりも対象となる科目数が少ないため、単純に比較するのには注意が必要であろう。もっとも、受講人数の多いクラスでは、学生の満足度いかに関わらず、きめの細かい指導ができにくくなることも事実であり、授業における指導の有効性といった観点から見れば、受講者数は少ない方が好ましいといえる。受講者数が 50 人を超えた場合、むしろクラスサイズそのものよりも、教員の講義内容や教授法によって満足度が左右される可能性も考慮する必要がある。

なお、前回の授業アンケート調査（2016 年度）では、受講人数が 50 人を超えると満足度があまりかわらないという総括であり、今回の結果とは若干異なる。今年度のアンケート結果から、受講者数と満足度の関係の散布図を[図 1]に示した。図内の○が各授業に該当する。あくまでも感覚的な評価に過ぎないが、満足度を受講者数で説明することは難しいと思われる。このことから、今回のアンケート結果をもって受講者数と満足度の関係に関する議論は、ここに記載した以上のものは難しいと判断した。



②教員の職位・年齢との関係

教員の職位・年齢と満足度との関係は [表 3] のとおりである。単純に平均値だけを見ると、教員の年齢が高い程平均値が低く、(職位と年齢には相関があるので職位で区分することに意味はないが) 職位が高い程満足度が低いという昨年度と同様の結果となった。

[表 3] 職位・年齢と満足度

	教授	准教授	専任講師／助教	非常勤	全体
～ 39 歳		4.24	4.19	4.29	4.25
40 歳 ～	4.40	4.27	4.49	4.14	4.22
50 歳 ～	4.14	4.16	4.21	4.04	4.09
60 歳 ～	3.97	3.95		4.04	4.00
全 体	4.06	4.18	4.25	4.10	4.15 ^{※1}

※表内各項目は小数点第3位以下を四捨五入しているため、それぞれの合計が必ずしも※1とは一致しない。
また、外れ値と考えられる2名分は除いた。

今回のアンケートの生データを用いて、年齢と満足度の間の相関をとると、相関係数は、-0.376 で統計的に有意な負の相関 ($p < 0.01$) という「弱い相関」が見られた。これまでの授業評価報告で述べられてきたように、教員の年齢と授業満足度には負の相関があることは今回のアンケートからも裏付けられたものの、相関係数が-0.376 であることから、少なくとも教員の年齢以外の要因も満足度評価に関係している可能性が高いことも示唆される結果となった。つまり、教員の年齢を下げれば学生の満足度がわずかに上昇する可能性はあるが、それ以外の未知の因子 (必ずしも単一の因子ではない) による効果の方が高いということである。生データを個別にみると、年齢が高い教員でも高い満足度評価を得ているものもあり、その逆の場合もある。担当科目の特性もあり、一概には言えないが、たとえば、教授スキルや授業内容をあげるにより全ての年齢の教員が授業の満足度を好転させることが出来ると考えられる。このことから、年齢の高い教員の授業は学生の満足度が低いという短絡的な結論を出すことには慎重であるべきであると考ええる。

③出席率との関係

全体のアンケート結果を、授業への出席率が高い群と低い群とに分けて集計し、この二群の集計結果を比較できるようにまとめたものが[表 4]である。

[表 4] 出席率の高・低二群における各項目の平均値

	出席率が高い	出席率が低い	差
Q2. 内容は知的刺激に富んでいた	4. 266	3. 641	0. 625
Q4. 理解度に合わせて授業を進めた	4. 059	3. 494	0. 565
Q5. 教材が理解に役立った	4. 241	3. 652	0. 589
Q6. 教員の板書や図の見やすさ	4. 055	3. 478	0. 577
Q7. 教員の声が聞き取りやすかった	4. 281	3. 662	0. 618
Q8. 説明がわかりやすかった	4. 162	3. 564	0. 598
Q11. 私語に対し適切な対応だった	4. 226	3. 595	0. 631

これをみると、ここで抽出されている質問項目のすべてにわたって、出席率の高い群の方の評価が、低い群の方の評価よりも 0.5 から 0.6 ポイント高くなっていることがわかる。出席率による差が大きい項目は、「Q11. 私語に対し適切な対応だった ($\Delta 0.631$)」、「Q2. 内容は知的刺激に富んでいた ($\Delta 0.625$)」、「Q7. 教員の声が聞き取りやすかった ($\Delta 0.618$)」、「Q8. 説明が分かりやすかった ($\Delta 0.598$)」の順で差が大きかった。「知的刺激の強度」、「説明の分かりやすさ」が出席率に現れる学生の意欲に関連していること、また、「私語に適切に対応すること」を出席率の高い学生が授業に集中したい意欲的な学生が求めること、は容易に推察できる。一方で、前回の総括でも指摘されているが、教員の板書や声の聞き取りやすさは出席率とは関係なく優劣があるものと思われるが、それにもかかわらず二群の間でこのような差が出ているということは、満足度が一定レベル以上の授業の場合、授業内容や教授技術に関わりなく、出席率が高いほど評価を高く、また出席率が低いほど評価を低く付けるというバイアスが潜んでいる可能性はある。

また、出席率を問う「Q14. よく出席した」の項目について学類ごとにみると(全体の平均は 4.40)、出席率の高い順に、こども発達学類 (4.59)、健康栄養学類 (4.54)、服飾造形学類 (4.46)、日本文学文化学類 (4.33)、家政福祉学類 (4.32)、国際学類 (4.29)、心理学類 (4.23)となっており、こども発達と健康栄養、服飾造形学類 (4.46) が平均を上回っている。

こども発達学類や健康栄養学類は資格取得に直接結びついている授業が多いため「よく出席した」が高くなる傾向はあるため、学類同士を横断的に比較することは簡単には出来ない。しかし、[表 4]の「Q2. 内容は知的刺激に富んでいた (0.625)」、「Q8. 説明が分かりやすかった (0.598)」といった出席率の高い学生が出席の低い学生より高い評価を与える項目の評価を高めて行くことで、逆に授業への出席率を上げて行く方向を各教員が模索することは意味のあることであると考ええる。

(2) 共通総合科目の課題

下の[表 5]は、共通総合科目全体の各質問項目における平均値と、各質問項目の全体の平均値、そしてその間の差を示したものである。差の部分は全体平均から共通総合科目の平均値を引いており、数値が大きいほど、各項目で全体の平均よりも低い値であることを示している（マイナスが付いていれば逆に全体平均よりも高い）。これを見ると、共通総合科目においては、昨年度と同様、すべての質問項目において平均値よりも低い数値が出ていることがわかる。なかでもとくに平均値からの乖離が大きいのは「Q15. 予習・復習の時間」(0.3 ポイント)「Q13. 積極的に意見や質問をした」(0.2 ポイント)。そのほか、「Q9. 質問への対応が適切だった」「Q4. 理解度に合わせて授業を進めた」で0.1 ポイント程度の乖離が出ている。また、共通総合科目の総合的満足度（Q19. 授業の総合的満足度）は4.11 で全科目の平均と比べ0.03 ポイント低くなっている。ただしこれは、前回の3.99よりは向上しており、平均値との差も大きく縮まっており、改善されたと評価できる。

[表 5] 共通総合科目全体（降順）

質問項目	平均	全体平均	全体平均－平均
Q15. 予習・復習の時間	2.21	2.51	0.30
Q13. 積極的に意見や質問をした	3.19	3.40	0.20
Q9. 質問への対応が適切だった	4.03	4.13	0.10
Q4. 理解度に合わせて授業を進めた	3.98	4.08	0.10
Q6. 教員の板書や図の見やすさ	3.98	4.07	0.09
Q17. さらに勉強したくなった	3.86	3.95	0.08
Q16. 試験に積極的に取り組んだ	4.00	4.09	0.08
Q3. 新しい知識・技術を学べた	4.19	4.26	0.06
Q2. 内容は知的刺激に富んでいた	4.18	4.23	0.05
Q5. 教材が理解に役立った	4.16	4.20	0.04
Q18. 受講を後輩に勧めたい	4.01	4.05	0.04
Q12. 教員の熱意を感じた	4.23	4.26	0.03
Q1. シラバスに沿っていた	4.21	4.24	0.03
Q8. 説明がわかりやすかった	4.08	4.10	0.03
Q10. 開始・終了時間が適切だった	4.22	4.24	0.03
Q11. 私語に対し適切な対応だった	4.14	4.17	0.03
Q19. 授業の総合的満足度	4.11	4.13	0.03
Q14. よく出席した	4.38	4.40	0.02
Q7. 教員の声が聞き取りやすかった	4.20	4.22	0.02

また、共通総合科目のなかでも外国語科目だけを取り出してみると、全体の平均値からさらに低くなっていることがわかる。なかでも最も乖離が大きいのが「Q18. 受講を後輩に勧めたい」で全体平均よりも0.3ポイント低く、「Q3. 新しい知識・技術を学べた」で0.29、「Q17. さらに勉強したくなった」で0.28ポイントも低い。さらに全19項目中、これらを含めた8項目で0.2を超える乖離があり、15項目で0.1ポイント低くなっている。ひじょうに不思議なのは、この外国語科目の評価が、一昨年度は全体的に高く、共通総合科目全体と比べてもかなり評価が高くなっていたことである。この外国語科目の評価が、昨年度になって急に低くなったのはたいへん不思議であり、その原因の解明が待たれるところである。

[表 6]外国語科目のみ（降順）

質問項目	平均	全体平均	全体平均－平均
Q18. 受講を後輩に勧めたい	3.75	4.05	0.30
Q3. 新しい知識・技術を学べた	3.96	4.26	0.30
Q17. さらに勉強したくなった	3.67	3.95	0.28
Q2. 内容は知的刺激に富んでいた	3.97	4.23	0.26
Q19. 授業の総合的満足度	3.88	4.13	0.25
Q8. 説明がわかりやすかった	3.86	4.10	0.25
Q12. 教員の熱意を感じた	4.04	4.26	0.22
Q5. 教材が理解に役立った	4.00	4.20	0.20
Q7. 教員の声が聞き取りやすかった	4.03	4.22	0.19
Q1. シラバスに沿っていた	4.05	4.24	0.19
Q9. 質問への対応が適切だった	3.94	4.13	0.19
Q4. 理解度に合わせて授業を進めた	3.90	4.08	0.18
Q6. 教員の板書や図の見やすさ	3.90	4.07	0.17
Q11. 私語に対し適切な対応だった	4.04	4.17	0.13
Q10. 開始・終了時間が適切だった	4.12	4.24	0.12
Q16. 試験に積極的に取り組んだ	3.99	4.09	0.09
Q15. 予習・復習の時間	2.43	2.51	0.09
Q14. よく出席した	4.38	4.40	0.02
Q13. 積極的に意見や質問をした	3.41	3.40	-0.02

[表 7] 一昨年度（2016）の外国語科目（降順）

質問項目	平均	全体平均	全体平均－平均
Q18. 受講を後輩に勧めたい	3.85	3.98	0.13
Q3. 新しい知識・技術を学べた	4.12	4.24	0.12
Q17. さらに勉強したくなった	3.75	3.85	0.10
Q2. 内容は知的刺激に富んでいた	4.07	4.15	0.08
Q5. 教材が理解に役立った	4.06	4.14	0.08
Q12. 教員の熱意を感じた	4.16	4.21	0.05
Q8. 説明がわかりやすかった	4.01	4.05	0.04
Q7. 教員の声が聞き取りやすかった	4.13	4.17	0.04
Q19. 授業の総合的満足度	4.04	4.08	0.04
Q16. 試験に積極的に取り組んだ	3.96	3.97	0.01
Q1. シラバスに沿っていた	4.16	4.16	0.00
Q6. 教員の板書や図の見やすさ	3.99	3.96	-0.02
Q4. 理解度に合わせて授業を進めた	4.04	3.99	-0.05
Q9. 質問への対応が適切だった	4.11	4.05	-0.06
Q11. 私語に対し適切な対応だった	4.13	4.06	-0.06
Q14. よく出席した	4.48	4.41	-0.07
Q10. 開始・終了時間が適切だった	4.28	4.21	-0.07
Q15. 予習・復習の時間	2.41	2.27	-0.14
Q13. 積極的に意見や質問をした	3.46	3.19	-0.28

2016 年度授業評価の分析においては、全体的に共通科目の評価が低い理由として、次の二点を指摘した。第一にクラスサイズ、そして第二に各学類の専門領域との分野の違いである。共通総合科目全体での評価の低さは、昨年度においてもやはり同じ理由が考えられるであろう。そしてとくに第二の理由に関しては、今後も変わりようがない。しかし、それだからこそ、担当教員は専門分野の異なる受講生にもわかりやすく、そして興味を持たせるように授業を進める工夫が必要とされる。昨年度の評価において、共通総合科目全体としての評価が上がったことは好ましいことであるが、それが担当教員の授業改善努力の結果であるかどうかはこのデータだけではわからない。ただしもしそうであれば、望ましい方向への変化であるといえよう。

それにしても気になるのが、外国語科目の評価が全体的に下がった点である。一昨年度の授業評価に対する分析で、共通総合科目の評価が全体的に低い原因の一つをそのクラスサイズの大きさに求めたのは上記のとおりである。そしてその理由の一つとして、外国語科目の評価が全体的に高いことに求めた。外国語科目のクラスサイズが小さいからである。しかし、今回の結果からは、単に外国語科目の評価の急落という現象だけでなく、クラスサイズの授業評価に対する影響という要因に関しての再考をも迫られる。昨年度になって急に外国語のクラスサイズが大きくなったとは当然考えられず、よって外国語科目の評価の急落はクラスサイズの要因によるものとは考えにくい。もしクラスサイズに変化がないとするならば、今回の外国語科目の評価が下がったことは、それ以外に何らかの大きな要因があるものと考えられる。このデータだけではそれが何であるかは特定しづらいが、これほどまでに大きな影響を与えた要因があるとするならば、今後、それを追究する必要があるであろう。

(3) 専門科目の課題

[表 8] は授業の総合的評価に関わると考えられる項目について、学類ごとの評価平均値を示したものである。まず、「Q19. 授業の総合的満足度」の項目について、高い順に学類ごとに並べると、日本文学文化学類 (4.26)、健康栄養学類 (4.23)、こども発達学類 (4.18)、服飾造形学類 (4.18)、国際学類 (4.17) と、ここまでが全体平均 (4.13) より上、続けて、心理学類 (4.11)、家政福祉学類 (4.09) の順になる。同じく総合的評価にかかわると思われる設問「Q17. さらに勉強したくなった」では最も高いのがこども発達学類 (4.13) で、3 番目の日本文学文化学類 (4.03) と入れ替わっているが、他は変化がない。また「Q18. 受講を後輩に勧めたい」では、最も高いのが健康栄養学類 (4.20) で次がこども発達学類 (4.16) になっている。それぞれの設問で順番は異なっているが、上位 3 学類は変わっていない。特筆すべきは、一昨年度の授業評価で上位 3 学類には入っていなかった日本文学文化学類が、昨年度の授業評価で入ってきている点である。この原因もこの調査だけからはわからないが、学類ごとの努力があったことも考えられ、その要因の追究がまたれる。もし日本文学文化学類で何らかの授業改善努力があるようであれば、それは他の学類にとってもたいへん参考になるであろう。

[表 8] 学類ごとにおける授業の総合的評価

学類 (降順)	Q19. 授業 の総合的 満足度	学類 (降順)	Q17. さらに 勉強したく なった	学類 (降順)	Q18. 受講を 後輩に勧め たい
日本文学文化学類	4.26	こども発達学類	4.13	健康栄養学類	4.20
健康栄養学類	4.23	健康栄養学類	4.10	こども発達学類	4.16
こども発達学類	4.18	日本文学文化学類	4.03	日本文学文化学類	4.14
服飾造形学類	4.18	服飾造形学類	4.03	服飾造形学類	4.08
国際学類	4.17	国際学類	3.98	国際学類	4.06
心理学類	4.11	家政福祉学類	3.90	心理学類	4.03
家政福祉学類	4.09	心理学類	3.88	家政福祉学類	4.00
全体平均	4.13	全体平均	3.95	全体平均	4.05

授業評価アンケート

このアンケートは授業をより充実させるために実施するものです。
回答内容があなたの成績に影響することは一切ありません。
裏面にもアンケートの設問がありますので回答をお願いいたします。

1. マークは濃い鉛筆またはシャープペンシルを用いてはっきりと記入してください。

ボールペンは使用しないでください。

2. 所定欄以外に記入しないでください。

あなたの学年にマークしてください。

☐ 1年生 ☐ 2年生 ☐ 3年生 ☐ 4年生 ☐ その他（聴講生等）

あなたの学類・専修又はコースのいずれか1つにマークしてください。

1年生	① 国際学類 ② 日本文学文化学類 ③ 心理学類 ④ こども発達学類 ⑤ 服飾造形学類 ⑥ 健康栄養学類 ⑦ 家政福祉学類
2~4年生 (新学類)	⑧ 英語コミュニケーション専修 ⑨ 国際社会専修 ⑩ 日本文学専修 ⑪ 日本語表現専修 ⑫ 書道専修 ⑬ 文化芸術専修 ⑭ 心理学専修 ⑮ こども発達学専修 ⑯ 服飾造形学専修 ⑰ 健康栄養学専修 ⑱ 家政福祉学専修
2~4年生 (旧学類)	⑲ 英文学専修 ⑳ 英語コミュニケーション専修 ㉑ 日本文学コース ㉒ 日本語表現コース ㉓ 文化芸術コース ㉔ 書道コース ㉕ 国際社会システム専修 ㉖ 心理発達コース ㉗ こども発達支援コース ㉘ 服飾造形学専修 ㉙ 健康栄養学専修 ㉚ 社会福祉コース ㉛ 生活科学コース
その他	㉜ その他（聴講生等）

マーク記入例

良い例	悪い例

回答は必ずおもて面から始めてください。

回答は必ずおもて面から始めてください。

おもて面から続く。		強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない	該当しない・答えたくない
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	5	4	3	2	1	0
Q14	この授業はよく出席した	5	4	3	2	1	0
Q15	この授業の予習復習等に当てた時間(毎週) ⑤3h以上 ④2~3h未満 ③1~2h未満 ②1h未満 ①特にしていない ⑥該当しない・答えたくない	5	4	3	2	1	0
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	5	4	3	2	1	0
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	5	4	3	2	1	0
Q18	この授業の受講を後輩にも勧めたいと思う	5	4	3	2	1	0
Q19	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください ⑤大変満足 ④やや満足 ③どちらでもない ②やや不満 ①不満 ⑥該当しない・答えたくない	5	4	3	2	1	0

Q20	この授業についての意見・感想・希望等あなたが思っていることをできるだけ具体的に何でも記入してください
-----	--

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。